

先生の生涯は、この二つの詩を結ぶ軌跡の上にあるように思えてならない。先の詩は、先生の研究者としての出発点である戦後間もない脈研での作であり、後者は亡くなる2年前最後の研究の場となる東京女子医科大学日本心臓血管研究所に居を構えられる直前のものである。出発点には無欲で純な研究者の魂が、終焉は研究の求道者としての真摯な魂が感じられると思うからである。正に、先生自らその人生を語っている詩と言えないだろうか。

先生は1947年、東京慈恵会医科大学を御卒業後、創立間もない広島県立医科大学に故西丸和義教授の求めに応じて赴任された。終戦直後も研究の意気に燃え、西丸教授が自宅に建てた研究所を脈研と称していたが、ここに若き先生は合宿された。冒頭の詩にある呉線天広駅から三つ先の阿賀にあった大学までを往復される毎日であった。又、すぐ目の前が瀬戸内海でもあり、当時の西丸研が、脈管学を主題とした比較生理学の研究だったため、クラゲ、ジャコ等を用いた仕事やリンパ管の仕事をされた。次いで各種動物の心拍動の研究に進み、無脊椎動物のセミ、カニ、イガイ、カキや脊椎動物のエイやカエル等の心臓を用いて、律動的収縮の解明に輝かしい成果を挙げられた。これらの初期の学問的活動を通じて、心拍動の発生機序を生涯のテーマとして心に持たれたようである。1958年助教授に、ついで1960年には西丸教授の後を受けて、広島大学医学部第一生理学教室の教授に就任された。弱冠36才の若さであった。この時から研究は細胞の段階から動物全体の発する信号まで多岐に渡る事になった。標本でも心筋に止まらず哺乳動物輸尿管平滑筋まで取り込まれ自動性の発生機序を探ろうとされた。又循環系の制御、中でも心拍動の中樞性制御に強い関心を持たれた。1979年56才の時、国立生理学研究所が誕生し、勝木保次先生はじめ先輩諸先生方のおすすめで、初代所長内閣耕二先生の招請に応じて岡崎に移られた。生理研では、全国から若い人々の参加を得て心筋細胞生理学を膜生理学の中心的課題に飛躍的に高められた。対象は、あらゆる心筋細胞に拡大されたが、中心課題は、ずっと洞房結節の自動能の発生機構であった。この様に生涯に渡って一つの研究課題を追求し続けられたことになろう。これらの業績に対して1987年、紫綬褒章と上原賞を受賞されたことは輝かしい出来事であった。特に紫綬褒章は、一芸を精進し続けた者に贈られるとして大変喜ばれたと聞く。しかし一方で、研究そのものを楽しまれ、生涯一学徒であり続けられよう

とされた。1988年、生理学研究所退官後も研究の場を求め、Giles 教授の招請で Calgary 大学へ赴かれた。ついで終の場となった東京女子医科大学日本心臓血管研究所に細田嗟一教授の恩顧により場を移され、さらに実験を続けようとした。年を取ると充実した時間は短い、だからテレビは持たない。研究者たるもの残るのは論文だけだから、やった実験は必ず形にしなければいけないと常に言われる東京での生活であったとうかがう。カナダに行かれる折、冒頭にも出てくる「世の中はいずれかさして我がならんゆきとまるをぞ宿とさだむる」という古今和歌集卷十八にある歌の葉書をもらった人は多い。研究の場を求めて地球の何処にでも行こうという心意気を持って、一つのテーマを追求し続ける一学徒として生涯有り続けようとした姿勢が、この便りを見る度に思い起こされ、先生の真摯さに打たれる。先生の生涯は、学問のみならず人生の師であり続けた西丸教授の好きな言葉「漁夫生涯一竿」であった。ただあまりに早い先生の御逝去が、先生にとってもどんなにか無念であったことだろうと思う。

しかしこれだけで先生を語ることは一面的である。先生は決して孤独な求道者ではなかった。人が本当に好きであった。その特質から多くの人々がよい影響を受けたのである。中でも意欲のある若い人には積極的に学問的自立を手助けされた。先生の研究室には祭りの持つ熱気があった。若い人々を入沢研の研究という祭りの渦の中に上手に乗せられ、その心の中から熱いものを引き出された。研究テーマを巡って積極的な意見の交換と、得られたデータについては厳しい評価があった。若い個性のぶつかり合いは、議論の下手な日本人の常として心の中に癪を残しがちであるが、入沢研では、何故か議論に流れが出来た。門下から輩出し、独立した教室を営む者が国の内外において8名に及ぶ事はその学恩の深さを示している。又先生は声を荒げて怒られることが無かった。有名な入沢スマイルに励まされたと言う人は我々直接的に仕えた者に限らず多くの方々から聞く事である。先生は徒党を組む事なく、学問の本当に好きな人とは年齢、国を問わず幅広く交際された。そしてその友情を非常に大切にされた。1957年 University of Washington で開講された心臓血管生理学コースに先生ご夫妻が参加されて以来、当時の指導者 Rushmar 教授ご夫妻とは若き日の生理学における交流に加えて、最近では水彩画を通じてより一層友情を深められていた。又そうした方々が、

先生の研究の節目節目で、蔭に日向に先生を助けられたことも痛感する。例えば、1970年、広島大学医学部も大学紛争の中にあり、先生はその解決に熱心に取り組まれた。しかし学問的空白も否めなかった。その時立ち直りの機会を提供されたのが、Bern 大学の Weidmann 教授である。スイスでは積年の念願であった洞房結節の自動能発生機構へ挑戦され、今日の心臓生理学の発展の礎を築かれた。そして Weidmann 教授のこの御好意を、ずっと多とされてきた。さらに、度々出席された国際学会を通じても友情の輪を広げられた先生は、国際的に良き友を沢山持たれた。この友情をもとに1967年には West Virginia University の客員教授、1968、1970年には Woods Hole M. B. L. の

Instructor, 1970~1971年 University of Bern, そして 1988~1989年 University of Calgary の客員教授を務められた。生理研を退官された際、東京で行われた記念国際学会には、一線の心臓生理の研究者が、米国、ヨーロッパ、アジアから参集し先生を盛り立てた。東京女子医大心研でも亡くなる直前まで常に国際的良きライバル、友に囲まれて活躍された。このように先生の人間の魅力が日本の生理学の国際的輪を広げた功績も大きく、その核の一つを失った事も惜しまれる事である。

七七日忌も近い平成3年12月24日正四位勲三等旭日中綬章を追叙された。
(瀬山一正)



ウッズホール・ノブスカ燈台
入 沢 宏 画